

エッセイ

アパルトヘイトは終わっていない

——パレスチナと交差する世界

長沢美抄子（中東文化研究家）

紹介したい詩とアピール文がある。

一つはガザ（パレスチナ）の詩人による詩。

ロスト・イン・エルサレム

サラールハ・オマル

ぼくが見た彼女の眼...情熱的なセリフに満ちて
美しく混沌とした超新星の物語を形作る
ぼくは彼女の言葉のなかで迷ってしまった日を思い出す
しかも彼女の反逆精神...だがなんという楽勝！.
それはきみの微笑みに包みこまれた月
そうだ...きみを天使と呼ぼう
ぼくはこの8月に2通の手紙をきみに送った
きっと兵隊たちは手紙を受け入れなかつただろう
抑圧の暗いフェンスで分離された
輝かしい若い恋人たちの不思議な物語を
若い青年には夢みることが許されてはいなかったが
彼女は彼の思いの中...彼女は彼の思いを捕らえて話さない。

（ガザ、2019） 訳・関場理一

恋の歌でもあるが、まがいのない抵抗の歌である。フェンスで隔てられた若い男女に恋を実らせる自由はない。往来する自由を奪われながら、切ない想いを募らせる二人。けれども彼女の情熱、毅然とした反逆精神を愛する彼は、それを彼のレジリエンスに変えていく。自由を手にする日を夢見る彼と彼女。パ

レスチナ人の生が苦悩の中にも躍動し、明日への扉を叩こうとしている。また、詩のタイトルにある「エルサレム」は彼らにとって何にも代えがたい「パレスチナ」という存在を示してもいるだろう。そのかけがえのないパレスチナが被ってきた運命の苛酷さを嘆いているようにも思える。詩人サラハ・オマルはこの詩を17歳のときに書いた。現在19才の、外国に出て国際法を学びたいと夢見るガザの青年である。8歳でパレスチナの国民詩人マフムード・ダルウィーシュの詩に出会い、詩の虜になった。言葉の力はどんな横暴な圧制者よりも強いと信じている。

ガザは世界中から孤立させられたゲットー。2百万人が住む人口過密の巨大ゲットー。この詩には分断され閉じ込められた彼ら彼女らの思いが凝縮し、そして炸裂している。



題「収穫」画家ナディア・ハマドさんはパレスチナ系米国人

2021年5月

次にパレスチナ人の芸術家と知識人たちが作成した「アパルトヘイトに反対する書状」というアピール文を紹介する。

2021年4月のエルサレム近郊のシェイク・ジャラーで始まった抗議運動と弾圧、そしてすさまじい軍事攻撃にさらされた5月のガザを覚えておられるだろうか？ ガザがイスラエルによる大規模な軍事攻撃を受けるのは2008年末の攻撃から数えて4度目のものであった。

このガザの惨劇の最中に、「アパルトヘイトに反対する書状 (A Letter Against Apartheid)」は生まれ、そして発表された。

ここで全文を紹介する「書状」は英仏西阿語の4カ国語で5月26日に公開された。呼びかけ人約320名の中に、作家、美術家、映画監督たちの名がある。パレスチナを代表する3人の映画監督、ハニ・アブ＝アサド、エリア・スレイマン、メイ・マスリも。また、賛同人の中には、米国のレイシズムに抗議する思想家・活動家のアンジェラ・デイビス、『ショック・ドクトリン』の著者でユダヤ系カナダ人ナオミ・クライン、米国の映画監督マイケル・ムーア、ファッションデザイナーのアニエス・ベーなどの名があり、板垣雄三氏、徐京植氏も賛同人に加わっている。

6月初旬に頼まれた「書状」の和訳をし終えた私は、次に、これを日本で発表できるようにと協力を依頼され、手を尽くしたものの、予想以上に険しい壁に突き当たった。しかし、月刊『詩人会議』2月号誌上で初公開として実現できたのに次いで、若干の加筆と修正をして、こうして再び貴重な機会を得ることができた次第である。

「アパルトヘイトに反対する書状」

今、エルサレムやリッダ、ハイファ、ジャッファにて、「アラブ人を殺せ」と連呼しながら市街をうろつき回るイスラエルの兵士や武装した民間人によって、パレスチナ人は襲われ、殺されています。しかし襲撃する彼らはなんの罪にも問われないのです。過

去6週間、武器も持たず、無防備なパレスチナ人に対するリンチが繰り返し行われてきました。エルサレムのシェイク・ジャラー地区の家族は、住む家からの立ち退きという民族浄化の暴力に晒され続けています。このような殺人、脅迫、暴力的な追い出し行為はイスラエル政府や警察の保護下でなされており、表立って推進されているとすら言えるでしょう。

この5月、イスラエル政府はガザで、パレスチナ人の住居、職場、病院、道路などを無差別かつ容赦なく爆撃し、またしても大虐殺を行いました。ガザへの空爆は、家族全員が殺され、地域のインフラが破壊されるという、意図的に繰り返されてきた攻撃パターンのひとつです。その結果、地球上で最も人口密度の高い場所の一つであり、すでに生活不可能なガザの状況がさらに悪化しているのです。たとえ一時的に停戦が成立しても、軍事的包囲下にある状況には変わりはないのです。ガザはパレスチナから切り離された国ではありません。私たちは一つの民族です。イスラエル国家という構造物によって強制的に切り離されてしまっているのです。

今の事態を、拮抗する2つの勢力が相争うという戦争として捉える表現は誤っており、誤解を生みます。イスラエルは植民地化を進める権力であり、それによってパレスチナは植民地化されているのです。これは紛争などではなく、アパルトヘイトそのものなのです。

先月、一気に高まった死の危険に直面して、パレスチナ人は団結を取り戻しています。パレスチナだけでなく世界中で、多くの人々が街頭に出て、ソーシャルメディア上でコミュニティを拡大し、自分たちの住居を守り、互いを保護しながら、民族浄化、アパルトヘイト、差別、土地収奪を止めさせるように訴えています。私たちパレスチナ人は、1948年のイスラエルの入植者的植民地支配の幕開けとなったナクバ（大災厄）以来、自分たちの帰還の権利を組織的に否定され、強制的に粉々に分断されて、その存在を消し去られてきました。しかし、この1か月半の怒りと悲しみの中で団結は強まり、それによって私たちに必要とされた自信を得たのです。私たちに襲いかかったすべての悲劇にもかかわらず、人間としての尊厳を抹殺され続けてきた長きにわたる年月にもかかわら

ず、私たちは一つの希望を感じ始めています。

ついに世界は、イスラエルの体制を「アパルトヘイト」という名前で呼び始めたのです。今年初め、イスラエルの人権団体ベツェレム (B' Tselem) は、数十年にわたるパレスチナ人の知的・法的弁護活動による成果をもとに、イスラエル国家とその軍事的占領の両者は相互に結びついた一体のものであるということ、つまりこのイスラエル国家と軍事占領は一つのアパルトヘイト体制を形成していることを明白に証明しました。そして今度は、(米国に本部を置く国際人権 NGO) ヒューマン・ライツ・ウォッチ (Human Rights Watch) が、イスラエルは「アパルトヘイトおよび迫害という人道に対する犯罪行為」を犯していると告発する詳細なレポートを発表しました。

この書状の末尾に署名する我々パレスチナ人アーティスト、作家、そして芸術分野の友人たちから、皆様にお願ひがあります。共に加わって力になってください。どうか、この重大な機会を逃さないでください。パレスチナ人の声が再び封じられ沈黙させられてしまえば、自由と正義のための新たなチャンスが生まれるまでに何世代もかかるかもしれません。この重大な岐路にある今、皆様に参加していただき、パレスチナの解放への支援を示していただけるよう私たちは願っています。

私たちは、パレスチナ人に対するイスラエルの暴力を即時かつ無条件に停止することを求め、世界の大国がイスラエルとその軍隊に提供している支援を止めることを求めます。特に米国は、現在、年間38億ドルの軍事支援を無条件でイスラエルに提供しています。私たちは、すべての良心のある人々に、以下のことをお願いします。今の時代も残るアパルトヘイト体制を停止させるために、力をお貸しください。

この、人類に対する犯罪を許す各国政府に対し、私たちは訴えます。軍事支援を止める制裁を行うこと、国際的な説明責任を行使すること、貿易・経済関係、文化交流を断つことを。活動家、特に芸術分野の方々に私たちは訴えます。皆様の属する組織や地域の中でご自身の力を発揮し、脱植民地化を求めるパレスチナ人の闘いを可能な限り全力でご支援ください。イスラエルのアパルトヘイト体制は国際的な共犯関係によって維持されており、この害悪を取り除くことは私たち皆の集団的な責任です。

私たちは、最近どのようにヨーロッパやその他の諸国政府が、パレスチナ人の連帯を妨げるために公然とした検閲政策を導入し、自己検閲の文化を育んできたかを見てきました。イスラエル国家とその対パレスチナ人政策に対する正当な批判を反ユダヤ主義と結びつけるのは、大変不当なことです。反ユダヤ主義を含む人種差別、そしてあらゆる形態のヘイトは憎むべきものであり、パレスチナ人の闘いにおいて決して歓迎されるものではありません。今こそ、こうした沈黙を強いるたくらみに立ち向かい、打ち勝つ時です。世界中の何百万人もの人々が、パレスチナ人の中に自分たち自身の抑圧と希望の縮図を見ており、ブラック・ライヴズ・マター (Black Lives Matter) や平和を求めるユダヤ人の声 (Jewish Voice for Peace) などの盟友たちや、先住民族の権利を訴える活動家たち、フェミニストやLGBTQの活動家たちなど、他にも多くの人々がますます声を大にして支援を表明しています。

どうか、勇気を出してください。パレスチナで続いているこの不正に対して、名乗り出て、声を上げ、明確な立場を表明していただけるよう訴えます。

アパルトヘイトは撤廃されなければなりません。

全ての人々が自由になるまで、誰も自由ではありません。

(<https://www.againstapartheid.com>)

※ 英文、署名者などは上記サイトで見ることができます。

アパルトヘイトは終わっていない

「書状」署名運動の成果は目立たないが、しかしパレスチナへの共感の世界的な高まりに影響を及ぼしているはずだ。現在、賛同署名者数は2万を超え、現在も増えつつある。

実は、これを日本で紹介するには、パレスチナにおけるアパルトヘイトという表現がわかりにくいから、この言葉を使う意味と理由を解説する必要がある

との助言があった。ウーン、そうなのか…。しかしどこからどう説明すればよいのだろう？ ネットで読む英字新聞のパレスチナ関係の記事には連日のように「アパルトヘイト」の文字があふれているのに。

悩む私に大先輩が思い出させてくれた。ジミー・カーター元米大統領著の『パレスチナーアパルトヘイトではなく平和を』という2006年に出版された本〈注1〉のことを。その本がきっかけでアパルトヘイトという用語は「中東和平問題」の重要トピックになり、使われだした。カーターが堂々と自著のタイトルにしたことは画期的であった。

西岸に食い入ってイスラエルが築いた西岸を縦断する分離壁をイスラエルは防護フェンスと呼び、パレスチナではアパルトヘイト壁と呼ぶ。監視技術の最先進国であるイスラエルに常に監視されている占領下のパレスチナ人たちは、無数の検問所や監視塔によっても日常生活に困難を強いられている。入植地群は西岸に膨れ上がるばかりである。入植者たちによるパレスチナ人狩りも日常茶飯事だ。占領は暴力である。

土地収奪、家屋破壊、逮捕投獄、人権侵害は続いている。殺戮も珍しくはない。子どもも容赦されない。悲劇は後を絶たない。天井のない監獄、ガザ・ゲッターに閉じ込められた2百万人の人々は劣悪な環境の中で暮らす。いったい若者の未来はどこにあるのだろうか？

南アではアパルトヘイトは終わったかもしれないが、世界を見渡せばアパルトヘイトは至るところにある。ウイグルの人々、西サハラの人々の苦しみはアパルトヘイトのせいではないのか？パレスチナ問題の根っこにあるアパルトヘイト体制は果たして終わるであろうか？その特異で複雑な構造を考えると、容易には解体できないだろうと悲観的になるが、イスラエルの支配体制の制度がアパルトヘイトに該当すると国際的に認識されつつあるのは、大きな前進だ。

ここで、アパルトヘイトが国際条約〈注2〉でどのように定義されているかを確認しよう。アパルトヘイト犯罪の定義は以下の三点に要約される。

- 1) ある人種による他の人種に対する支配を確立・維持する意図
- 2) ある人種集団が他の人種集団を組織的に抑圧する体制と状況
- 3) 非人道的行為

占領下パレスチナの人々はまさしくアパルト体制の下に生きているのだ。その占領体制下で生きているパレスチナの人々は直接的な身の危険だけではなく、住み続けることができなくなる危機にもさらされている。ましてや、奪われた故郷に戻る権利はまだない。

広がる連帯の輪、交差するパレスチナと世界

BLM 運動(ブラック・ライブズ・マター)の米国における盛り上がりとともに、これに連動するように活発になっているのが、パレスチナ人との連帯の動きである。BLM のデモにはパレスチナのフラッグや横断幕も見られる。アンジェラ・デビスが BLM だけでなく果敢に先頭に立って行動するパレスチナの「BDS 運動」は重要である。南アの実績と経験を生かし、パレスチナの市民運動として生まれた BDS は、イスラエル製品のボイコット (B)、投資撤回 (D)、制裁 (S) を柱としている。この運動が世界に広がっている。また、イスラエルへの軍事援助、投資はイスラエルの軍事的冒険にも与することになる。米国民の血税が、パレスチナ人を殺戮する武器や弾薬、監視施設に利用されるという仕組みにも米国市民は気づき始めている。

イスラエルは (パレスチナ) BDS 運動を非合法としたにもかかわらず、じわじわと世界で浸透をし続けているのと並行して、パレスチナの人権 NGO も世界に支援の輪を拡大した。そのような地殻変動に脅威を感じたイスラエルは 2021 年 2 月から 10 月にかけて、国際的に支持されているパレスチナの 10 団体の主に人権を擁護・監視する NGO を「テロ組織」に指定するという国際法違反の暴挙に出た。見境がない。特に 10 月に国際的にも信頼を得ている 6 団体を一度に「テロ組織」に指定した〈注3〉ことへの反発は大きかった。すぐに世界から非難声明が出された。アムネスティ・インターナショナルもヒューマン・ライツ・ウォッチも非難声明を出した。日本の BDS 団体 (BDS Tokyo) も「パレス

チナの NGO 6 団体を『テロ組織』に指定したイスラエルに抗議する声明」を 11 月末に発表している。

南アのアパルトヘイト体制を解体させるに、世界が力を合わせたボイコット運動の圧力は大きかったと思う。27 年間獄中にあったマンデラを解放（1990 年）したのは、その力だった。パレスチナの人たちも獄中のマンデラと ANC との強い絆を持っていた。1993 年にノーベル平和賞を受賞し、翌年に大統領に就任したマンデラ大統領は国際舞台でパレスチナ人たちを隠せず代弁した。この英雄は、イスラエル国家と南アのアパルトヘイト体制との密着・並行性の歴史を熟知していた。マンデラ亡き後の南アの人々もパレスチナ人たちにとって頼りがいのある支援者だ。そして南アのもう一人の英雄、2021 年 12 月に死去した反アパルトヘイト活動家で世界的な人権活動家であったデズモンド・ツツ大主教（1984 年にノーベル平和賞受賞）が、パレスチナの BDS 運動の先頭に立って支援した人でもあったことをパレスチナの人々は忘れない。

パレスチナ問題の本質は、民族浄化である。そしてアパルトヘイトは民族浄化と分かちがたく結びついている。そもそもアパルトヘイトは、民族浄化が徹底できないという現実に対応するためにやむを得ず生み出された制度と考えるのが正しいと思う。アパルトヘイト体制下で、まさに今いっそう激しくなって続いているシェイク・ジャラーやネゲブの住民たちに対する卑劣な追い出し、家屋破壊は民族浄化そのものである。シェイク・ジャラーでは、それを阻止しようと現地に駆けつけ、連日連夜の監視を続け、抗議するイスラエルの人々がいる。その中には日本人もいる。

ガザ・ゲッターの人々が 2018 年春にイスラエルとの境界線フェンスすれすれのところで「帰還の大道行進」のスタンディングデモを始めた。ガザ封鎖に抗議する「帰還の大道行進」は多くの犠牲を出した。だが、たとえ一時的に鎮まっても、終わることはない。人間として生きる権利、自由、正義、平等、公正、帰還の権利、奪われたものを取り戻すために闘いは続くだろう。イスラエルの

アパルトヘイトは解体されなくてはならない。そのために不可欠なのは世界の人々の良心だ。

〈注1〉 Jimmy Carter, *Palestine: Peace Not Apartheid*, Simon & Shuster, 2006
日本語版もある。『カーター、パレスチナを語るーアパルトヘイトではなく、平和を』 晶文社、2008年。

〈注2〉 1998年の国際刑事裁判所ローマ規定と、1973年の国連総会で署名・批准されたアパルトヘイト犯罪の抑止及び処罰に関する国際条約。

〈注3〉 2021年10月19日、イスラエルのベニー・ガantz国防相は、パレスチナの人権組織、Addameer Prisoner Support and Human Rights Association、Al Haq、Bisan Center for Research and Development、Defense for Children International、Union of Agricultural Work Committee、Union of Palestinian Women's Committeesの6団体を「テロ組織」に指定した。

[追記]

もう一つの注目される署名運動がある。2021年7月6日付で公開された

“Declaration on the Suppression and Punishment of the Crime of Apartheid in Historic Palestine” 「歴史的パレスチナにおけるアパルトヘイト犯罪の抑圧と処罰に関する宣言」である。2021年9月4日現在で45カ国以上の世界各地から1,111名の署名者数となっている。在仏のチュニジア人数学者アハメド・アベス氏が呼びかけ、ノーベル平和賞受賞者の二人アドルフォ・ペレス・エスキヴェル氏とマイレッド・マグワイア氏、ノーベル化学賞受賞者のジョージ・スミス氏など著名人が名を連ねる。ジャーナリスト、学術研究者が特に多く、ユダヤ系の人々の名もアラブ系の人々の名も多い。音楽家も含まれ、ロジャー・ウォーターズ氏の名もある。来日経験のある研究者ヤコヴ・ラブキン氏、シール・ヘヴェル氏、ローズマリー・サイーグ氏、サリーム・タマリ氏も署名に参加している。なお、エスキヴェル氏は故小田実氏と親しく、1982年のイスラエルのレバノン侵攻後、「イスラエルのレバノン侵略に関

する国際民衆法廷（東京）」（1983年3月）が小田実氏と板垣雄三氏と（故）芝生瑞和氏の呼びかけで実施されることが決まった時、真っ先に賛同人になった人である。